



Title	芸能実践の豊かさを生きる－沖縄移民の芸能から広がる人やモノのつながりの研究－
Author(s)	栗山, 新也
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51836
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 栗 山 新 也 ）	
論文題名	芸能実践の豊かさを生きる ——沖縄移民の芸能から広がる人やモノのつながりの研究——
論文内容の要旨 本論文は、近代の沖縄の移民や出稼ぎが成し遂げてきた芸能実践の豊かさを、沖縄から多くの人びとが移動した大阪・南洋群島・ハワイまでを含む広大な地理的空間において描きだすものである。 序章ではまず、この「芸能実践」の含意を、芸能が演じられている瞬間だけでなく、芸能を生み出す過程や、芸能に必要なモノの流通の過程で、人びとやモノが関係を取り結ぶことと捉え、対象となる行為や活動の枠を拡張する。さらに芸能実践の豊かさが生じる条件として、（１）芸能を生み出す過程で人びとが関係を結ぶこと、（２）芸能を稽古する過程で人と人、人とモノとが関係を結ぶこと、（３）人がモノを求め、モノが人を媒介し、モノを運ぶ移動のネットワークが構成されること、の三点をあげ、これらを軸にして移民や出稼ぎの芸能実践を記述していくことを明示する。またこのような芸能実践の豊かさを記述するための方法論として、筆者自身が芸能実践の場につねに居合わせてきたことをあげ、それがどのように実を結んできたのかについて述べる。 第一章「流動する芸能実践」では、移民や出稼ぎの拡大とともに芸能実践のネットワークが沖縄の外にも広がっていく姿を大阪・南洋群島・ハワイの諸地域に密着して描き、そこでの人びとやモノの諸関係を検討する。具体的には、古典音楽の稽古の過程にみられる人やモノの関係、芸能実践と故郷との関係などに着目する。 第二章「行ったり来たり沖縄芝居」では、大阪・南洋群島・ハワイを巡業した沖縄芝居に焦点を当て、その事実関係を明らかにしながら、沖縄芝居の実践に様々な立場で参加する人びとの具体的な姿を掘り取っていく。1930年代に本格化した移民・出稼ぎ地での沖縄芝居の興行は、興行した地で演じ手、観客、裏方、後援者などに様々な人びとを巻き込みながら展開されていった。ここでは、こうした芸能実践の行為者たちの具体的な姿を捉えながら、沖縄芝居がいかなる人びとのつながりを媒介したのかを検討する。そのことによって、沖縄芝居の「越境」が、単に地理的な越境だけではなく、地理的単位を構成する既存の社会集団の境界を越境したつながりを作り出していくという重層的な意味をもつものであったことが明らかになる。 第三章「流浪する三線」では、沖縄とハワイとの間を行き交う越境的な三線に焦点を当て、その流通の過程で構成される人びとの関係を描き出すとともに、一丁の三線をめぐって多様な意味や価値が見出されていく姿を明らかにする。沖縄の伝統楽器・三線は戦前に移民地へと大量に持ち出され、最も集中したハワイには、1950年代の初め頃、4千丁にも及ぶ三線が渡っていたと言われる。ここではまず、戦前にハワイ移民たちがこだわりをもって収集した三線に焦点を当て、その流通の過程で人びとがいかなるネットワークを構成してきたのかを明らかにする。次いで、戦後ハワイから沖縄に戻っていった「里帰り三線」に着目し、それがいかなる人間関係でやり取りされてきたのか、またそのやり取りの過程では、一丁の三線をめぐっていかなる意味や価値が見出されてきたのかを明らかにする。このような検討を通じて、三線を媒介にして人びとが関係を積み重ねていくだけでなく、三線というモノ自体にも多様な価値が積み重なっていくことを示す。 第四章「沖縄レコードの流通経路とその音楽的体験」では、ハワイで流通した沖縄レコードに焦点を当てる。沖縄レコードは1910年代からハワイで流通し、ハワイ移民の芸能実践の場で積極的に利用されてきた。ここでは、こうした沖縄レコードの流通と利用の二つの側面に焦点を当て、そこにみられる人びとやモノの関係を明らかにしていく。まず焦点を当てるのは沖縄レコードの流通経路である。ハワイの邦字新聞の広告から商店を通じたレコードの流通をたどるとともに、現物資料をもとに商店を経ずに流通したレコードの流通の姿も検討する。次いで、ハワイでの現地調査を通じて収集したレコードアルバムやプライベート盤をもとに、ハワイに流通したレコードが古典音楽の稽古に利用されたことを明らかにする。そして最後に、ハワイに持ち込まれたレコードが、移民たちにいかなる音楽的体験を媒介したのかを検討する。 終章では、序章で示した芸能実践の豊かさがどのような形で現れたのかについて論じるとともに、残された課題を明示し、本論文の結びとする。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (栗山新也)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授
	副 査	大阪大学 教授
	副 査	同志社大学 教授
論文審査の結果の要旨		
以下、本文別紙		

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 芸能実践の豊かさを生きる
——沖縄移民の芸能から広がる人やモノのつながりの研究——

学位申請者 栗 山 新 也

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 杉 原 達

副査 大阪大学教授 川 村 邦 光

副査 同志社大学教授 富 山 一 郎

【論文内容の要旨】

本論文は、近代沖縄の移民や出稼ぎが営んできた芸能実践の豊かさを、大阪、南洋群島、ハワイのつながりの中で記述するものである。

序章で、申請者は、先行研究をふまえて、芸能実践を「芸能が演じられている瞬間だけではなく、芸能が生み出す過程や、芸能に必要なモノの流通の過程で、人びとやモノが豊かな関係を織りなしていく集合的实践」として設定する。そしてその芸能実践の豊かさの条件として、①芸能を生み出す過程で人びとが関係を結ぶこと、②芸能を習い覚える過程で人と人、人とモノとが関係を結ぶこと、そして③人がモノを求め、モノが人を媒介し、モノを運ぶ移動のネットワークが形成されること、に注目し、長期的スパンや絶えず流動的に再構成されるダイナミズムの中で検討を進めると述べる。その際、申請者自身の演奏体験が、研究の原点であり原動力として各章の資料収集においても、また考察にあたっても重要な導きの役割を果たしてきたことが記される。

第 1 章は「流動する芸能実践」と題される。まず前提として、沖縄から大阪、南洋群島、ハワイへの出稼ぎ者や移民の過程を把握する。ここで重要な点は、人の移動から文化の展開を一方的に説明してしまうのではなく、モノの移動、芸のワザの移動に注目したうえで、それを媒介したのが人の移動であったという形でとらえ返す視点の新鮮さである。この基礎の上で、第 2 章以下では、芝居、三線、レコードが論じられていく。

第 2 章は、「行ったり来たりのおきな」で題される。「芸能が地域をこえて交流展開するダイナミズムについて、沖縄芸能史研究では言及されてこなかった」と先行研究の問題点を挙げたうえで、各地での沖縄芝居の興行の実態を、『大阪球陽新報』やハワイの邦字新聞などの文献とインタビューをうまく活用して具体的に明らかにし、「実践に関わる人びとの姿をすくい取る」ことを課題とする。具体的には、大阪では「戎座」での興行、サイパンでは「南座」、テニアンでは「球陽座」での興行、そして新垣松含一座のハワイ各島の巡業興行が、後援者の実相とともに詳細に記述される。また資料の読み込みや聞き取りから、沖縄芝居の興行は、沖縄出身者を中心としながらも常にそれ以外の人びとを抱え込んでいく動きをもっていたことを指摘する。

第 3 章は「流浪する三線」を取り上げる。さまざまな三線をめぐって、たとえば楽器としての実用性、珍重さ、形見の品といったレベルの異なる意味付与が行われていく過程は、とりもなおさずそれらの流通と交渉を担う人

びとの関係の中で進められてきたものであった。申請者は、こうした多様で独自の意味が付け加えられていくプロセスを全体として芸能実践として提起する。三線の流通とネットワークのあり方の詳細な分析、とりわけ「里帰り三線」とよばれる沖縄から持ち出されて、何年もしてまた沖縄に戻ってきた三線の軌跡の調査は、本書に貫かれている申請者の問題関心と照応するものである。

第4章では、戦前ハワイにおける沖縄レコードの流通経路とその音楽的体験を扱う。前者は、ハワイの邦字新聞に掲載された広告から、レコード流通の具体的な姿を掘り起こす作業である。後者は、レコードが沖縄移民の芸能の稽古の場にどのように取り入れられ芸の修得に関わったかを問題とする。ここではとくに個人収集のレコードの流通と利用のあり方が検討され、ハワイ移民がレコードをまとめ買いして持ち帰ったことや、プライベート盤レコードの存在が口伝えでの芸能伝承とは異なり繰り返しの独習が可能な方法の登場をもたらしたことを明らかにする。

終章は、全体を概括するとともに、今後の課題を整理して述べる。

【論文審査の結果の要旨】

以上の内容をもつ本論文の特徴の第一は、芸能実践の豊かさを軸に据えてモノとその流通に注目するという基本姿勢を一貫させたことである。人の移動こそが主側面で、それに伴ってモノが動き、文化も変容すると論じがちである移動研究に対して、モノの移動、芸能の技の移動こそが主役で、それを媒介するのが人の移動であるという考え方は、思い切った発想の転換ともいえる。だが、これは芸能実践の豊かなあり方とそれが可能になる条件を歴史的に考えようとする申請者ならではの姿勢からつかみ出された観点であり、そのことによって古典芸能の稽古にみられる人とモノとの関係や、芸能実践と故郷との関係に新たな光があたることになった。

特徴の第二は、こうした特徴を裏付けるための広範な資料収集と分析の力である。各種の刊行物の収集の徹底さは目を引くが、そのみならず各地の新聞を一般記事はもとより広告欄にも注目し、総合的な芸能実践としての資料群の中にまとめ上げていく点に大きな力量が見られる。また2人の元役者からのインタビューは極めて貴重なものであり、沖縄芝居の歴史的展開のみならず広く芸能実践の歴史的研究に大きな共有財産となるであろう。

とはいえ、若干の問題点も存在している。まずは、芸能に関するヨリ多彩な理論的研究の参照が求められるところである。次に、沖縄出身者が芸能を軸に集まる場合と、労働（闘争も含めて）を軸に集まる場合との異同という問題は、理論的にも実証的にも一層の分析を必要とするであろう。また証言の中から芸能に関するトピックを取り出すことは本論文の目的から当然としても、戦争の影響との直接的・間接的つながりに、細かな視点をもつことが要請される。さらに、芸能が実現される場の具体的な状況の探求も望まれる。たとえばハワイでの盆踊りは本願寺の境内での開催が多かったが、内地出身者との関係も含めて考察すべき課題は少なくない。

しかしこれらの点は、いずれも今後の課題であり、一段と深い研究によって克服が期待できるものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。